

小豆生産安定現地検討会 (兵庫県)

(公財)日本豆類協会

近年、国産小豆の需要に見合う生産は重要な課題となっていることから、日本豆類協会は、令和元年度に、北海道に生産・流通・加工等各分野の専門家を派遣し、現場の生産、普及、試験研究等の関係者との意見交換を行いました。小豆の需要に見合う安定生産を図る上で、こうした取組を北海道以外の都府県でも行うことが重要であることから、5年度には「京都大納言」を有する京都府下において現地検討会を開催しました。

7年度は、全国2位の小豆の生産規模を誇り丹波大納言を有する兵庫県において、近年の多雨、高温、干ばつなどの環境要因によって収量が不安定化している現状等についての相互理解を深めるとともに、今後の取組についても情報共有を図り、小豆の生産・流通が抱える課題の解決に資することとしました。

ここでは、現地検討会の際に伺った小豆に関わる生産現場、試験研究の実態、現地関係者と派遣専門家との意見交換の概要を報告します。

なお、丹波大納言は植物学的には在来種の集合体です。兵庫県育成成品種で平成7年に品種登録された「兵庫大納言」小豆は、丹波市青垣町から収集した丹波大納言から純系分離されたもので、JA丹波ひかみでは、春日大納言（登録商標）の名で実需者に提供されています。

1. 開催時期

令和7年11月13日(木)～14日(金)

2. 開催場所

兵庫県丹波市及び加西市

3. 参加専門家(敬称略、五十音順)

五十部 誠一郎 日本大学生産工学部特任教授

江間 哲郎 森田公認会計士事務所

高橋 良二 元(国研)農研機構次世代作物開発研究センター主席研究員、

元筑波大学生命環境科学研究科教授

松本 聡 東京大学名誉教授

門間 敏幸 東京農業大学名誉教授、農林水産省産学官連携支援コーディネーター

4. 現地検討会の概要

(1) JA丹波ひかみ特産センター（丹波市柏原町、11月13日）

JA丹波ひかみ営農経済部の岸本芳樹部長ほか皆さんに案内していただいて、特産センターを見学しました。センターは、農林水産省の令和元年度産地パワーアップ事業を活用して2年度に整備されたもので、3年度から本格稼働している選別調製施設です。従来は、生産者が収穫した小豆を個々の庭先で選別していたところ、この作業から解放されて、カビが生え、石化した粒だけを取り除いて特産センターに出荷する方式に変更されました。

センターには、比重選別機、粒径選別機及び色彩選別機が整備されており、また、荷受けは、規模の小さな生産者から大きな法人までのことを考え、袋だけでなく重さ1トンのフレコンにも対応できます。

生産者からは水分17%以下で荷受けし、出荷時には15%以下になるようにしていること、規格は、2L、L、Mの3種類で、2Lが20~30%、Mが1~2%未満、L中心であること、近年は高温の影響で小粒化している等の説明を受けました。なお、選別から落ちた規格外のものも有効利用しており、捨てるものはほとんどないとのことでした。



JA丹波ひかみ特産センターの施設内

(2) 夢の里やながわ本店（丹波市春日町、11月13日）

お店が木曜日は定休日でお休みのところ、株式会社やながわ柳川拓三代代表取締役にお話を伺いました。

柳川社長は、やながわの原点は農産加工業にあり地域の特産物とともに発展してきたことを誇りとされています。しかしながら、丹波大納言などの特産物は原料としては有名であっても、地元のお店はほとんど使っておらず広がりがなかったこと、実際、地元菓子店に丹波大納言を使っているかどうかアンケート調査したところ、ほとんど使っていないとの結果に衝撃を受けられたとのこと。このため、付加価値を付け雇用も創出することを狙って地元で使われる取組を進めていること、また、小豆は甘くして餡として利用する以外にも多様な食べ方があることなどを熱心にお話しいただきました。

専門家の皆さんからは柳川社長のお話に、小豆の需要を増やそうとするうえで大切な示唆をいただいた、感銘を受けたとのコメントがあり、活発な質疑が行われました。

なお、春日局（江戸幕府三代将軍徳川家光の乳母）の生誕の地（丹波市春日町）と終焉の地（東京都文京区）というご縁があって、文京区本郷に「丹波やながわ 東京春日店」を構えておられます。



夢の里やながわ本店



夢の里やながわ本店(中央が柳川代表取締役)

(3) 生産者圃場（丹波市春日町、11月13日）

田村宗治氏圃場及び隣接する兵庫県農業技術センターによる土壌水分センサー設置圃場（伊藤氏圃場）において、生産現場を見学しました。

まだ緑も残り、枯れあがってはいない圃場を見ながら、収穫は剪定ばさみを使っての手作業で行っており、1日に5畝ほどしかできないこと、去年は高温干ばつのため花が咲いても莢が着かず、遅れて咲いた花に着いた莢の実が

なんとか収穫できたこと、例年、11月に入ると刈り始めるが今年は遅れていること、しかしながら12月15日頃には霜が降りるのでそれまでに刈り終わらないと、霜に当たると緑の実はじゅくじゅくになってしまうことなどの説明があり、土作りや雑草対策などについて熱心な質疑が行われました。雑草対策と土壌表面の過乾燥を防止するため、マルチを使用している圃場もありました。



田村宗治氏の圃場(左から二人目が田村氏)

(4) 大納言小豆発祥の地の石碑（丹波市春日町、11月13日）

次の会場に向かう途中、大納言小豆発祥の地の石碑に立ち寄り、記念撮影を行いました。



大納言小豆発祥の地の石碑

(5) JA丹波ひかみ春日営農経済センター（丹波市春日町、11月13日）

その後、現地関係者との意見交換を行いました。

(現地関係者)

JA丹波ひかみ営農経済部 山本健太氏(生産力強化部会及び生産指導担当)

JA丹波ひかみ特産センター 藤田孝氏（需要創造部会及び販売担当）
 丹波市産業経済部農林振興課農業振興係副課長兼係長 百木稔氏、荻野真理氏（需要創造部会及びぜんざいフェア担当）
 丹波農業改良普及センター主任 吉村佳典氏（生産力強化部会及び栽培指導担当）
 兵庫県丹波県民局丹波農林振興事務所農政振興課副主任 南條美月氏

（概要）

JA丹波ひかみ 山本氏より、丹波大納言小豆ブランド戦略会議の体制と取組について説明がありました。

丹波大納言小豆は丹波市春日町が発祥の地と言われていて、「粒が大きい」「煮くずれしにくい」等の特徴から和菓子等の材料として重用され、丹波市全域に生産面積が拡大してきたこと、しかしながら近年、生産者の高齢化の進行、気象変動等による生産の不安定化等が、農業者の生産意欲の減退、収量・品質の伸び悩みを招き、需要に对应されていない状況にあること、これらを踏まえ、丹波大納言小豆に関して必要な戦略の策定、生産体制の確立、生産意欲の増進、需要の創造等を図り、ブランド価値の更なる向上、確固としたブランド価値の確立を目的として、平成27年5月に戦略会議が設立されたとのことです。

戦略会議には、JA丹波ひかみ、丹波市産業経済部、丹波農林振興事務所、丹波農業改良普及センター、丹波市商工会、丹波市観光協会、丹波大納言小豆生産振興会が参画し、生産力強化部会と需要創造部会のふたつの部会から構成されます。

生産力強化部会の活動

- 作柄の確認等の調査
- 栽培指導
- 新技術や新規資材の栽培試験
- 生産支援等の取組

需要創造部会の活動

- 丹波大納言小豆ぜんざいフェア及びスイーツフェアの実施
- 商品開発（丹のバターサンド^{まごころ}）
- 食育活動（学校給食、調理教室、栽培教育、絵本作成など）
- PR活動（イベント出展、ふるまいぜんざい、丹波大納言小豆の日（11月

1日)の制定など)の取組
が行われています。

その後の意見交換のなかで現地関係者からは、大納言小豆の生産面の課題として、選別作業と収穫作業は、特産センターの整備により選別作業が必要なくなった一方で、依然として収穫作業は手作業で行われている実態を踏まえ、昨今の気象条件下であっても安定して収量を得ることのできる、栽培しやすい新品種の開発を切望する旨、強調されました。新品種の条件として、莢つきが良く、草姿が立つこと、ただし形質は変えてしまうと実需者から丹波大納言小豆ではないと言われることから俵型であることは必須とのことです。また、コンバイン収穫は取りこぼしが出てしまっていて収量が低くなる問題があること、加えてホオズキなどの雑草がネックとなっている現状も述べられました。

生産者が減り、稲作への回帰も加わって作付面積が減り、かつ生産が安定しない、思うようにとれない状況であっても何とか丹波大納言小豆を維持しなければならないとの思いが強調されていました。

専門家の方からは、収穫に関し、盛岡でゆずの収穫サポーターを募って成功している事例などが紹介され、さまざまな知恵を出すことが必要であることが共有されました。



丹波大納言小豆ブランド戦略会議の皆さんとの意見交換

(6) 兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センター（加西市、11月
14日)

(センター参加者)

所長 牧浩之氏
 農産園芸部 部長 杉本琢真氏
 課長 内橋嘉一氏
 主任研究員 湊政徳氏
 主任研究員 花田陽子氏

(概要)

冒頭、牧所長から、丹波大納言小豆に関するセンターの取組として、原原種の管理、湿害・乾燥害への栽培面の対応、高温・乾燥耐性があり機械収穫に適した新品種の開発の3つの柱で進めている旨、御挨拶いただきました。

その後、湊主任研究員及び花田主任研究員から、兵庫県における小豆の生産状況と課題、試験研究の取組についての説明がありました。このなかでは、気候変動により小豆の栽培環境が大きく変化する中、気象要素や土壌の水分動態が及ぼす収量変動への影響の実態解明と極端な気象現象の発生による土壌の乾湿害を緩和する新たな安定生産技術の開発を目的として研究を行っていること、特にチゼルを用いた湿害軽減技術の開発及び畝間灌水による乾燥害軽減技術の開発について説明されました。

さらに、小豆の高温応答試験の結果と、気候変動や機械収穫に適した収量・品質の高い小豆新品種の育成についての説明がありました。

続いて、質疑、意見交換が行われ、チゼル耕を選択した理由、土壌及び土層についての現状と生産者の意識、狭条密植栽培とコンバイン収穫の適性、白雪大納言小豆（兵庫県が育成し平成9年に品種登録。従来の白小豆に比べて大粒）の遺伝子の連鎖や、育種においてゲノム編集技術や放射線を活用しないことについて等、熱心な議論が行われました。

その後、兵庫大納言小豆及び丹波黒大豆の試験圃場を見学しました。



兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センターでの意見交換

● 5. 終わりに

今回の現地検討会では、1日目に丹波市の産地において生産から消費にいたる現状と課題、活動されている状況を把握した後、2日目に県立農林水産技術総合センター農業技術センターにおいて、生産面への課題にいかに応えようとされているか、両者が密接に意思疎通を図っておられる様子を知ることができました。

日本豆類協会は、令和7年度豆類振興事業において兵庫県立農林水産技術総合センターが実施する「近年の丹波大納言小豆主産地における気候変動に起因した減収要因の解明と土壤の乾湿害を緩和する安定生産技術の開発に関する研究」（7年度～9年度）を採択し助成しており、これに限ることなく今後も現地の皆さまとの意思疎通を図ってまいりたいと考えています。

なお、丹波市を訪問したときはちょうど4(5)にある丹波大納言小豆ぜんざいフェアが始まった時期にあたり、市内の移動中、あちらこちらでフェアの幟を見かけました。

最後に、今回の現地検討会を開催するに当たり、お忙しいところ御対応いただいた関係者の皆さま、特に調整等に御尽力いただいたJA丹波ひかみ及び兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センターの各位に御礼申し上げます。